

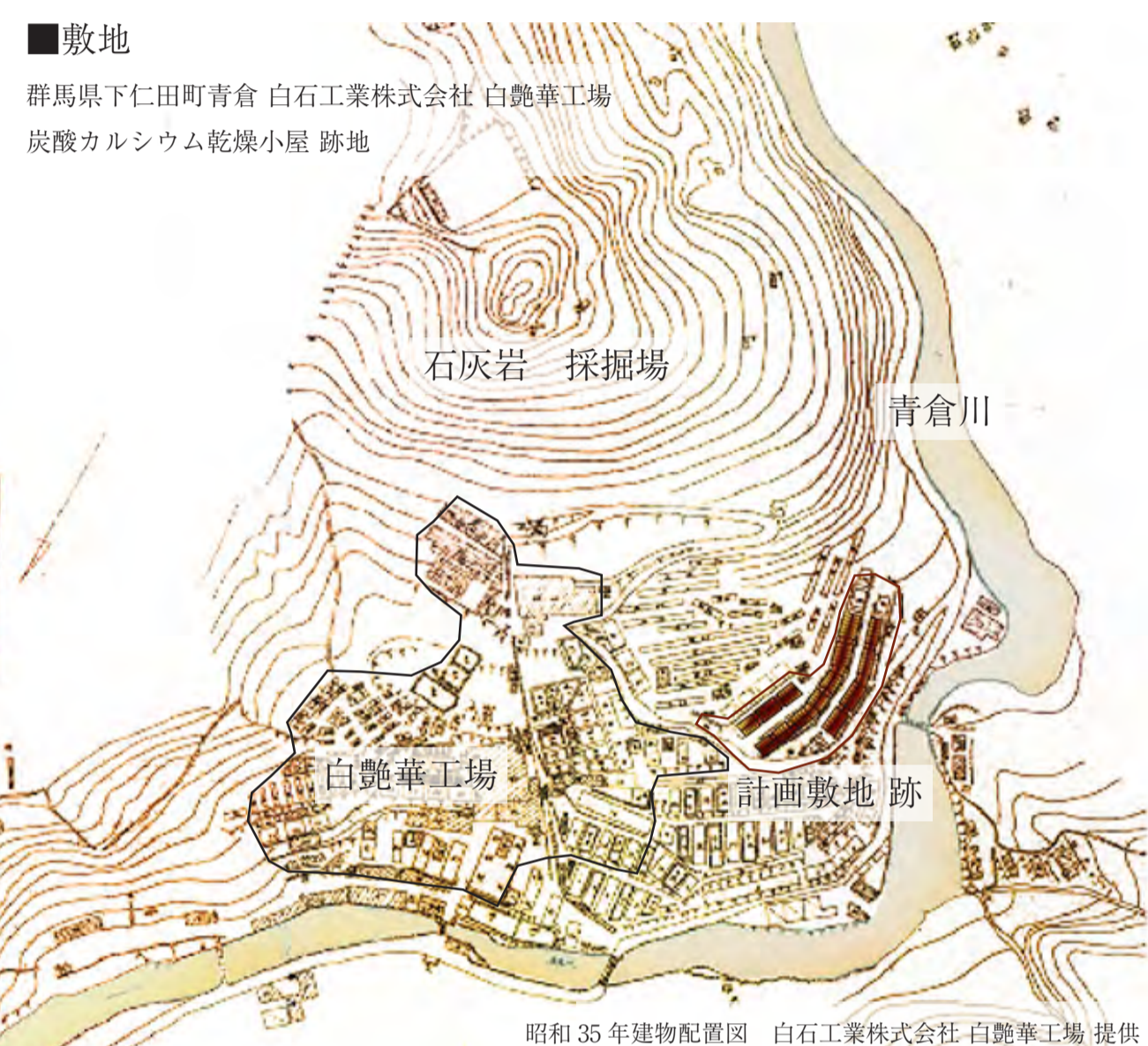


棚々 ~炭酸カルシウム乾燥小屋の復活~

炭酸カルシウム乾燥小屋は人知れず姿を消した。近代産業を物語るうえで象徴的かつ機能美に即した遺産であり、それが独特の景観を生み出していた。しかし、合理化の波には抗えず歴史の中、記憶の中に消えてしまった。炭酸カルシウムの自然乾燥という行為から生まれた建築形態、そしてかつての景観・象徴としての記憶を蘇らせ、当時の乾燥小屋と共に活動していた周辺地域、環境との共生を後世に伝える施設を復活させる。

敷地

群馬県下仁田町青倉 白石工業株式会社 白艶華工場
炭酸カルシウム乾燥小屋 跡地



石灰岩 採掘場 青倉川

昭和 35 年建物配置図 白石工業株式会社 白艶華工場 提供

歴史的消失の背景



昭和 30 年代後半 全景写真 白石工業株式会社 白艶華工場 提供

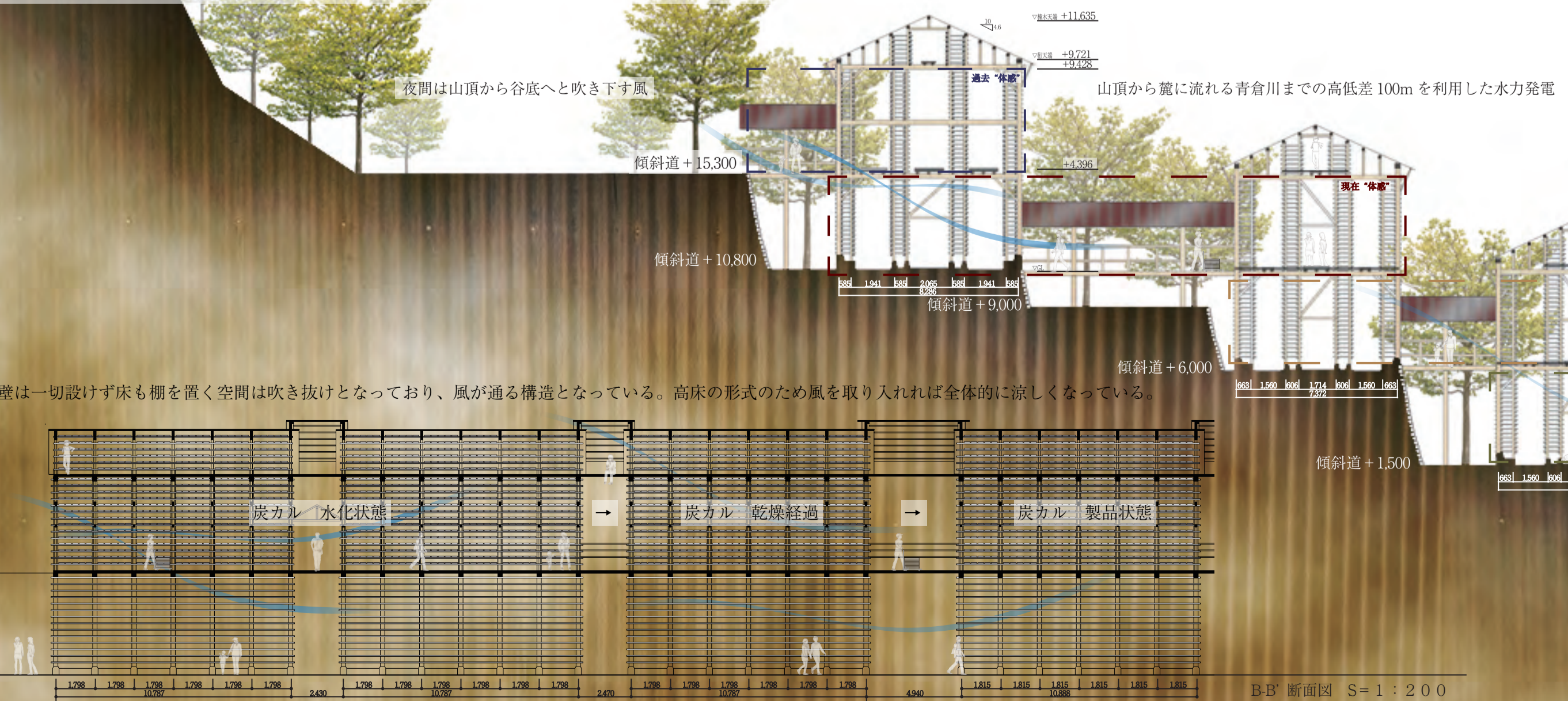
白石工業の乾燥小屋は、生産工程のうち製品の「自然乾燥」を主目的として建築された建物である。乾燥小屋は 1920 年ごろ全国に 5 箇所に点在しており、かつては敷地内に 100 棟以上の乾燥小屋が建ち並び、壮大な景観を誇っていた。しかし、自然乾燥から機械乾燥へと時代は移り変わり始め、平成 24 年時には群馬県下仁田町の 10 棟のみとなっていた。価値付けの史料は十分になく、学術的調査の実施も行われずして、最後に残存した棟は 2020 年に解体・撤去され姿は失われてしまった。



(1994 年 6 月 8 日) 上毛新聞掲載 白石工業 提供

環境共生と景観・象徴としての記憶

斜面に沿った配置は、山の等高線に対して水平、垂直になっている。これは夜間に山頂から、昼間に谷底から風が吹く山谷風を正面から受けるためである。そして山頂から麓に流れる青倉川を利用することで全体の電力をまかなっている。建築全体が環境との共生をはかっていた過去の記憶、産業遺産としての景観・象徴としての記憶を蘇らせている。



壁は一切設けず床も棚を置く空間は吹き抜けとなっており、風が通る構造となっている。高床の形式のため風を取り入れれば全体的に涼しくなっている。

単位的建築の調和

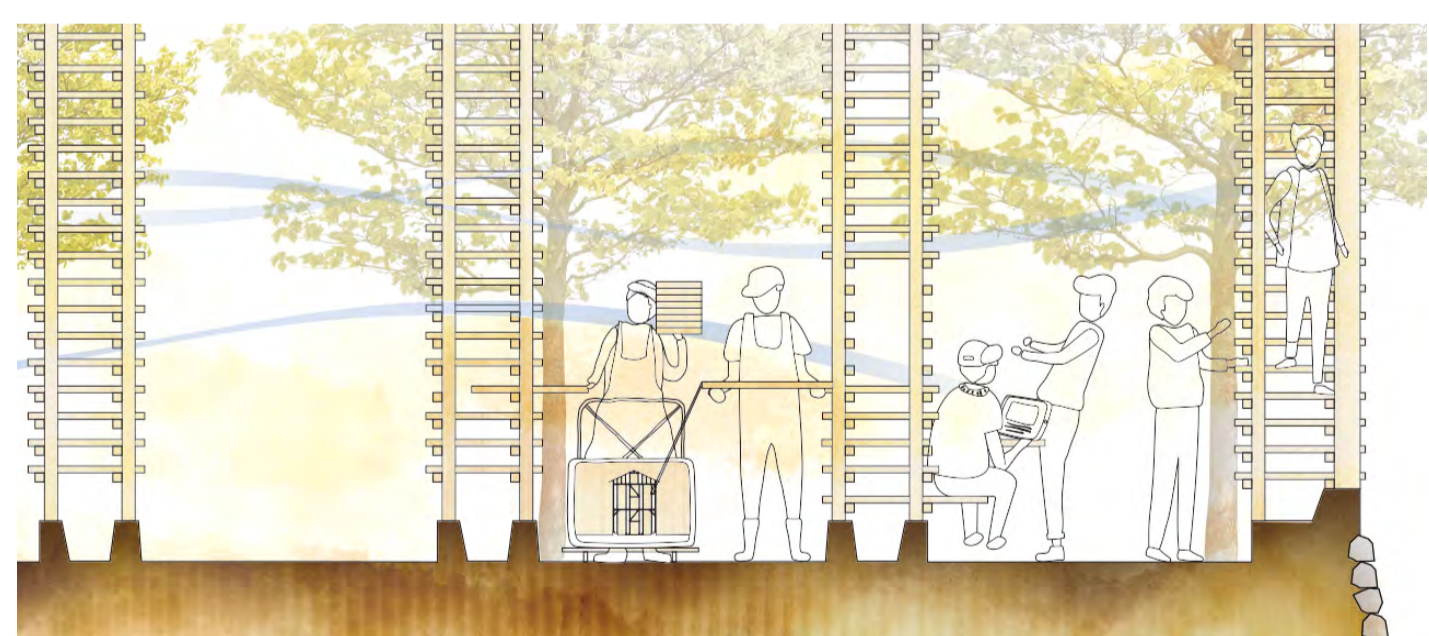
切妻のトタン屋根で高さ約 11m、階高約 4.5m の木造二階建て、となっている。梁間は約 8.2m、7.3m の 2 形式あり、桁行約 11m を 1 単位とし、斜面上に沿わせて「くの字型」に配置されている。1 階から 2 階、小室内まで材木で造られた棚は 40 段を超えている。同じ型の建築が連続性をもって建ち並んでいるが、敷地の不規則性、規定から外れた建物との混在による僅かな変化が統一と変位の調和を創り出している。



空間機能の再編

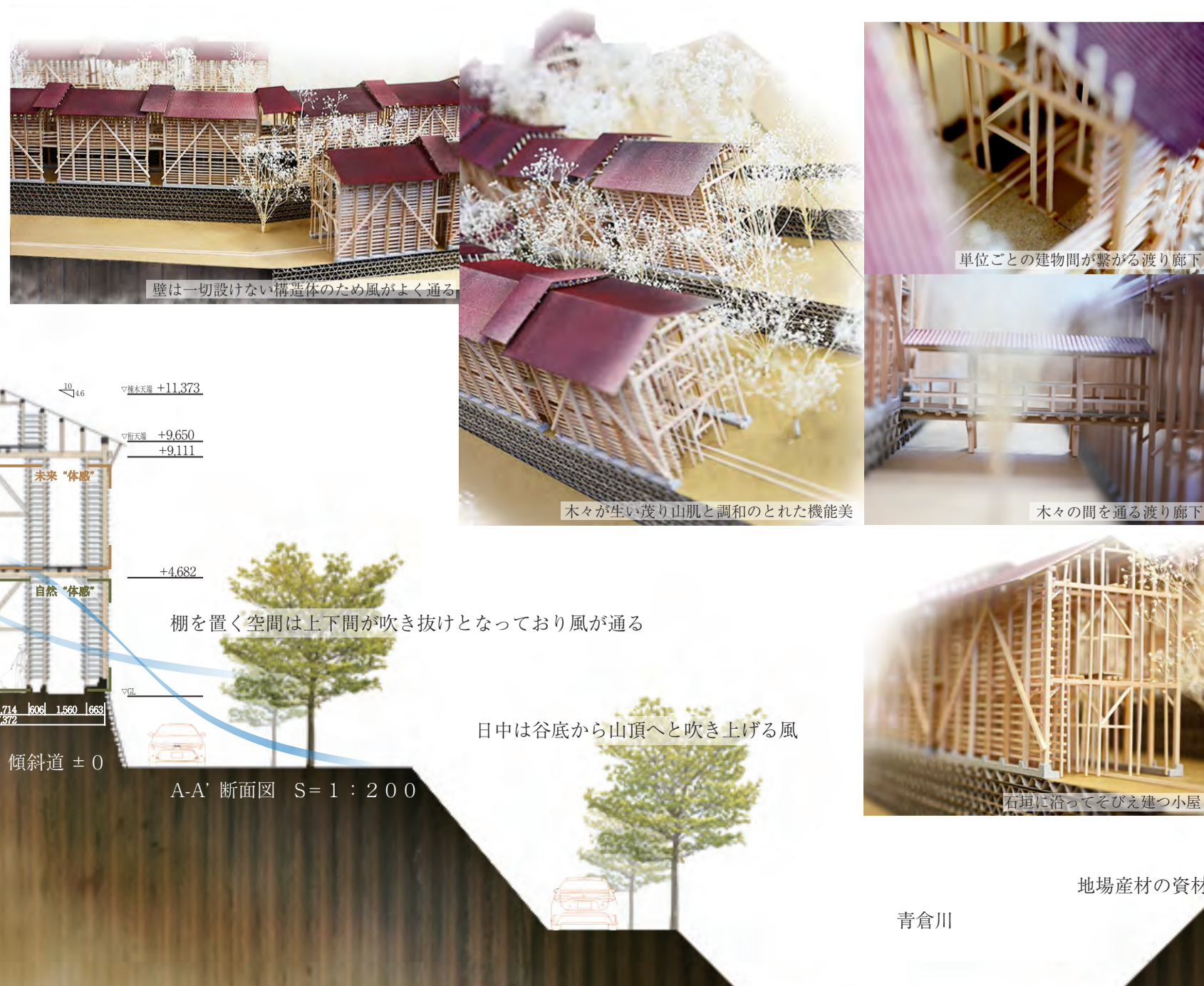
かつての空間は自然乾燥という機能から生まれた機能美である。その機能美の空間を残し再編を行う。炭酸カルシウムの乾燥小屋の棚が並ぶ風景はモノを飾りつつ「仕舞う」空間へ再編することで景観を復活させる。棚の上下間の連続性は押し込む位置を変えるだけで階段や梯子、椅子や机といった様々な人々の「交流」を生み出す空間へ。閉鎖的でありながら開放的な空間という新たな機能への再編に繋げる。

“自然乾燥” → “仕舞う” + “交流”



空間構成

観光者であれ、地域住民であれ、研究者であれ、産業遺産を「体感」することが大切。地域に目を向け少しずつ思考の歩みを進めると、そこにはさまざまな発見がある。山肌を降りていくにつれて過去から現代、未来への時間軸を、棚を押し込むように経過させていく配置とし、全体を支える自然の“体感”を基台として配置する。建築全体で“体感”の重なりが生まれ、乾燥小屋に目を向ける。真摯に向き合うことで産業としての新たな価値を見出すきっかけの空間を創出する。



壁は一切設けず床も棚を置く空間は吹き抜けのため風が通る

単位ごとの建物間が並ぶ視界

木々が生い茂り山肌と調和のとれた機能美

木々の間を通る風

棚を置く空間は上下間が吹き抜けとなっており風が通る

日中は谷底から山頂へと吹き上げる風

地場産材の資材

青倉川